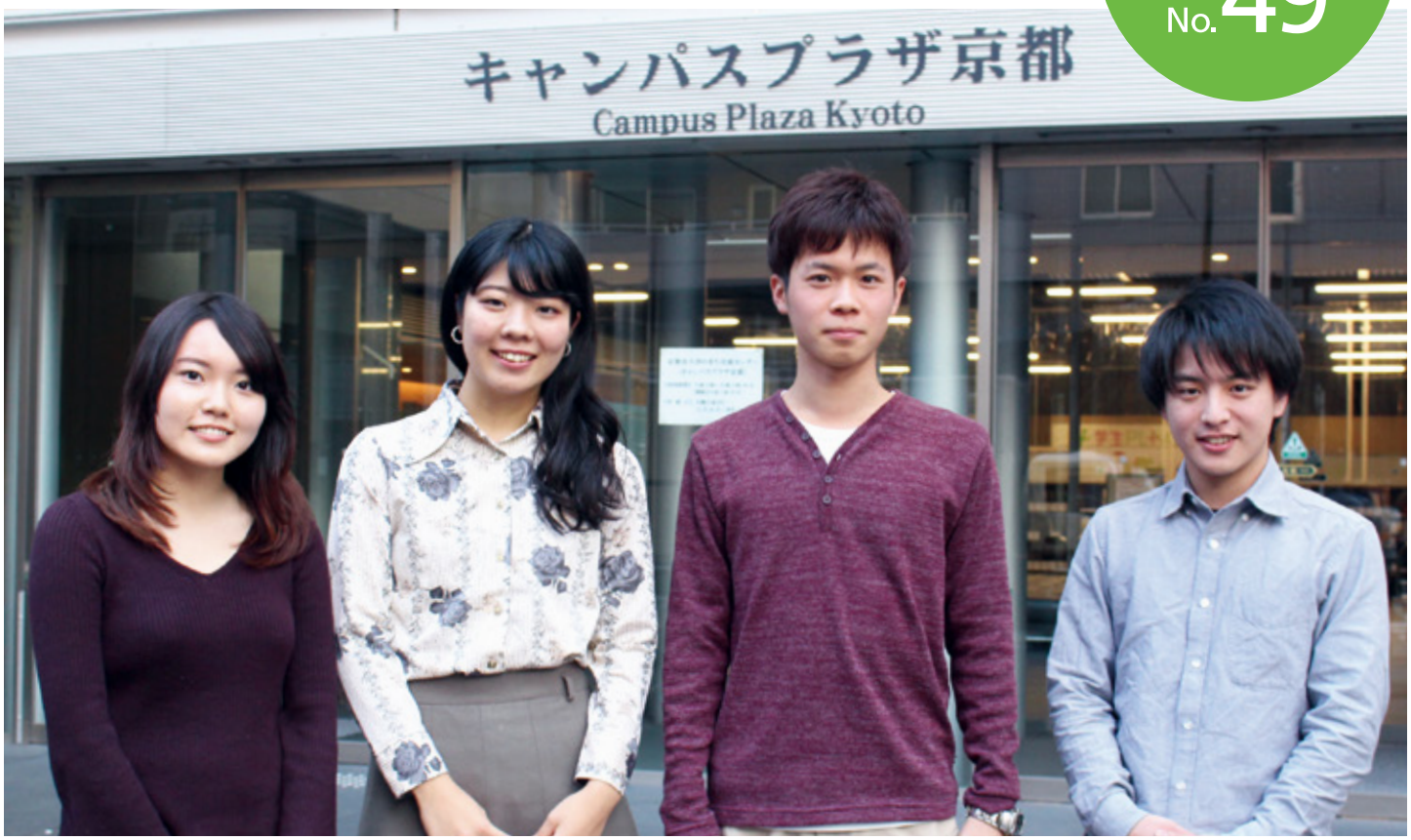
UNIVERSITY CONSORTIUM KYOTO

特集1 加盟校紹介 福知山公立大学

特集2 学生から発信する京都の魅力

特集3 出向経験者が語る
「出向を通じて得られたこと、学んだこと。」

会報
2018. Mar. No.49



公益財団法人 大学コンソーシアム京都
The Consortium of Universities in Kyoto

[特集１] 加盟校紹介

福知山公立大学

2016 年４月に前身の私立大学から公立化した福知山公立大学は、「地域経営学部」に「地域経営学科」と「医療福祉経営学科」を設置する１学部２学科で運営されています。北近畿地域唯一の４年制大学として、兵庫県但馬、丹波地域を含めた北近畿 10 市４町をキャンパスと捉え、全学生・全教員が地域でのフィールドワークを行う「地域協働型教育研究」に取り組んでいます。
また、北近畿地域連携センターを学内に開設し、2017 年５月には、兵庫県を含めた北近畿の“産学”が集まり地域課題を調査､研究するシンクタンクの機能を果たす｢北近畿地域連携会議」を設立しました。大学内に事務局を設置するなど、自大学にとどまらず、様々な機関と連携して北近畿地域の発展に向けて尽力されています。
開学から２年目を迎え、「地域の拠点」として、大学が取り組まれている活動や、今後の大学の展望について井口和起学長にお話を伺いました。

THE UNIVERSITY OF FUKUCHIYAMA

大学をまちづくりの中核へ

福知山公立大学
井口 和起 学長

市民の大学、地域のための大学、世界とともに歩む大学

Q　2016 年の公立化とともに学長に就任されました。貴学の基本理念である「市民の大学、地域のための大学、世界とともに歩む大学」に込められた想いについてお聞かせください。

[**学長**] 私は福知山市の出身で、これまでに福知山市総合計画や京都府中丹戦略会議の座長を務めておりました。そのご縁もあり、北近畿地域における４年制大学の在り方を検討する「公立大学検討会議」の委員長に就任しました。

その中で最終的に北近畿地域が抱える様々な課題解決を目指す拠点として、４年制大学が、まちづくりに大きく寄与するとの答申がなされました。当初、私が学長になるとは思ってもいませんでしたが、市から度重なる要請を受け、故郷への恩返しと思いお引き受けしました。

私は、２年前、公立大学として開学する際に「今から壮大な実験を始めます」と公言しました。

滋賀県東近江市愛荘町という人口５万に満たない町の図書館が Library of the Year という賞を受賞されました。町の中核に図書館を据え、まちづくりをされています。私どもは大学をまちづくりの中核に据えることを目指し、市民の皆さんと一緒にこの大学をつくっていきたいと考えています。

福知山公立大学 井口和起 学長

本学の基本理念には、福知山市民の皆さんの大学への想いが詰まっています。「市民のための大学、地域のための大学」とは、本学が地域の大きな拠点になりうるということだけでなく、地域住民の皆さんに支えられているという両方の意味があります。

いま、自然環境・地球環境などの環境問題に加え、少子高齢化により、地域社会のコミュニティや人間のつながりが希薄になっています。それに伴い、生活スタイルや価値観も大きく変わりました。

この地域が持続可能な地域社会として存続していくためにも、本学が知の拠点になり貢献したいと考えています。そして、本学が地域に根差して、発見した成果を世界に発信していきたいと考えています。

このように、大学づくりが地域社会づくりにもなり、地域づくりが大学づくりにもなると考えています。

地域との連携について

Q　貴学を語る上で｢地域｣というキーワードが欠かせません。これまでの地域連携の取組をご紹介ください。

[**学長**] 地域連携を進めるに当たって、基礎的な枠組みをつくりました。まず福知山市議会との連携、２点目に、福知山市内３つの地域協議会との包括協定の締結。３点目に、北近畿全体の連携組織である北近畿連携会議の設立があります。2017 年度から動きはじめました。この他、学生がフィールドとする地域との連携もあります。

ワークショップの様子

北近畿地域連携会議設立総会

1点目の福知山市議会には、本学を監督する公立大学法人評価委員会があり、計画の報告、審査を受ける制度的枠組が開学当時からありました。授業の一環として学生が議会を見学し、市議会からは、議員研修会に本学へ講師派遣依頼があるなど、相互のやり取りをきっかけに、個別の課題を巡る議員との意見交換等の協力関係ができました。

2点目の福知山市内3地域との連携については、旧福知山市と大江町、夜久野町、三和町が合併しましたが、旧町のそれぞれの地域協議会と包括的な協力協定を締結しました。

最後に、一番大きな連携になりますが、京都府北部の5市2町に、兵庫県北部の但馬、豊岡、朝来市等5市2町を合わせた10市4町で構成される北近畿地域について、シンクタンク機能を持つ北近畿地域連携会議を2017年5月に設立しました。この連携会議の特徴は、福知山公立大学と福知山にキャンパスを持つ京都工芸繊維大学、兵庫県豊岡市に大学院がある兵庫県立大学、金融機関、鉄道会社が代表として呼び掛け人となり民間主導で組織されたことにあります。会議には北近畿の農林商工関係やNPOなど約50団体が参加されています。

初年度の研究テーマとして、1つ目が高齢化に対応する交通システムについて、2つ目が北部地域の活性化、観光を含めた人の交流・まちづくりについて研究していきます。

こうした枠組みを活用することで、地域連携を深めるとともに、今後は、情報を相互共有し、大学に来ればその情報が得られるシンクタンク機能を果たしていく予定です。

地域協働型教育研究について

Q　教員も学生もフィールドに出て地域課題の解決にあたる取組について、お聴かせください。

[**学長**] 本学では、できるだけ協力し合って働く、働きかけ合うという意味で「地域協働型教育研究」と言っています。1年生から全員必修で学外に出て、地域の方々と交流し、とにかく「学び」を体験します。2年生になると、まちや企業に行き、「学び」の範囲を広げ、地域課題を調査・分析するための基礎的な方法を身につけます。3年生からは、具体的な研究テーマを絞り込み、4年目に卒論としてまとめる形をとります。卒業までの4年間ずっと地域と関わる教育カリキュラムを基礎に据えています。

Q　地域の方から寄せられる期待はいかがですか。

[**学長**] 私は地域の方々にいつも「皆さんが大学の先生にもなってほしい」と言っています。今は、受け入れに協力的なところへ行っていますが、地域の方々は、これまでこうした経験があまりないので、「何度も来られて面倒くさい」というご意見も、正直あると思います。それが、地域や市民の率直な反応だと思います。前学期だけ、あるいは1年だけ来て翌年は違うところへ行くというような一過性の体験では、地域の方から冷ややかに思われます。だから、学生には同じ地域へもっと深く入ってほしいと思います。4年間、その地域と向き合って初めて本当のことが分かることがあるからです。そうした経験から、自分たちが地域で何をすべきか考えることが始まり、学習につながると考えています。

本学の地域協働型教育研究は、まだこれからです。学生には、これからもっと地域に出て頑張ってもらいたいと思います。

Q　地域協働型教育研究では、福知山市内だけではなく、地域連携の枠組みを活かして、様々な地域で活動されているのですか。

[**学長**] 先ほどご紹介した地域連携の枠組みを活かし、福知山市外のフィールドにも出て行っています。演習科目だけでなく、講義科目においても地域の方をゲスト講師に招聘するなど、様々な形で地域と関わる授業を展開しています。

フィールドワークの様子

北近畿地域における唯一の4年制大学として

Q　北近畿地域から大学に寄せられる期待はいかがでしょうか。

[**学長**] 名前を見ていただければお気づきになるかと思いますが、福知山「公立」大学としていて、福知山「市立」とし

ていないんです。「福知山市立」としなかったのは、前の市長の非常に強いメッセージ・想いがあります。本学は、近隣の市町みんなでつくっている、福知山にある大学という意味で「公立」としています。大学では推薦入試に地域枠を設けていて、地元の高校生にも入学してもらいたいと思っています。また、福知山市をはじめ、近隣の市町でも地元からの進学者に独自の奨学金制度や優遇措置を図るような仕組みをつくっていただいています。

将来的に、卒業生が地元の市役所等の職員になってくれることや、他地域からの入学生が、この地域に魅力を感じて北近畿の地域の企業に就職してくれることに願いを込めて「公立」となっているのです。

Q　公立化以降、志願者数が大きく伸びています。その点についてはどのように受けとめられていますか。

[**学長**] 公立化で授業料が下がったことから、志願者がどっと増えました。しかしこのような効果は、1～2年しか持たないと思っており、常に危機感は持っています。全国的にも公立大学が増えました。また、本学の学生は、大都市からではなく、今年度は北海道から宮崎まで含めて全国各地から集まっています。身近な場所に公立大学ができたら、そちらに行くかもしれません。ですから、公立化したから安定するわけではないのです。

Q　地元の高校からの進学状況はいかがですか。

[**学長**] 地域経営という単独の学部でみると、地域外からの志願者が比較的多い状況です。その要因として、地域経営という分野が、将来どんな職業に就くのか、地元の高校生や進路指導の先生がイメージしにくいからかもしれません。また、理系学部がないこともあると思います。今、新しい学部を創設する構想や京都工芸繊維大学と連携した、新しい展開を市の構想会議で検討しています。

公立化にあたって福知山市では、1学年の定員を200人、大学全体で合計800人という構想を議会でお立てになりました。今後、定員を増加するためには、学部の新設や学科を変更しないと無理だろうと思います。そうすると、教員も増やしていかないとできませんね。

Q　今後それだけの学生がこのまちに住むと、まちの活性化にもつながりますね。

[**学長**] そうですね。福知山市は、家賃相場が京都市並みに高いので、学生がアルバイトに費やしている時間が多くなっています。それでいて、ボランティア活動にも精を出している学生が多いのも本学の特徴です。

Q　例えばどのようなボランティア活動をされているのですか。

[**学長**] 地域のお祭りの神輿担ぎや、市が主催するフェスティバルなどのお手伝いです。他には子どもたちと遊ぶボランティアや、社会福祉協議会と協力して介護が必要な高齢の方々とお付き合いをするなど、様々な現場を経験しています。そのほか、由良川の清掃活動などがあります。災害時の結束力が強いのは、水害の多い土地柄もあると思います。

Q　学生さんたちが自主的に活動されているのですか。

[**学長**] 自主的に活動しています。大学では、災害救援金のカンパの箱を設置したくらいです。あとは大学内にある北近畿地域連携センターに、地域からあらゆる相談事やお願いごとがやってきますので、相談内容に応じて、学生につないでいます。

北近畿地域連携センターカフェスペース

大学コンソーシアム京都に期待すること

Q　大学コンソーシアム京都に、期待することはありますか。

[**学長**] 福知山から京都市内へは距離があって、京都市内に学生は通うことができません。そのため各大学で取り組まれている単位互換のｅラーニング科目や海外への派遣留学制度が充実されれば学生が利用しやすくなると思います。

これから受験される高校生、自校の学生に向けてのメッセージ

Q　最後に受験生や自校の学生に向けて、メッセージをお願いします。

[**学長**]「数は力」と言いますように、新入生が158人入学し、大学の雰囲気が活気づいてきました。学生には、地域に出かけて思いっきり、元気に学んでほしいです。そして、本を読んで考える座学にも取り組んでほしいです。最後に、本学は「施設は貧しいけれども、心は豊かに」というメッセージを伝えたいです。

福知山公立大学ホームページ
http://www.fukuchiyama.ac.jp/

単位互換科目

京都ならではの学びがここにある！「京都世界遺産PBL科目」

京都全体で学生を育て、明日を切り拓く人材を輩出したいという想いから、単位互換授業の一つとして、京都の世界遺産を学びのフィールドに、寺社・仏閣やその周辺地域が抱える課題を発見、解決する「京都世界遺産 PBL 科目」を 2015 年度から開講しています。

2017 年度は、清水寺×立命館大学、二条城×同志社大学、仁和寺×立命館大学、上賀茂神社×京都産業大学、比叡山延暦寺×京都文教大学、醍醐寺×京都橘大学、醍醐寺×龍谷大学が開講されました。

成果発表会では、受講生が学修成果に至る経過をまとめ、世界遺産関係者や大学関係者が見守る中、プレゼンテーションが行われ、学生ならではの感性を活かした提案が発表されました。

大学のまち「京都」、歴史のあるまち「京都」だからこそできる学びが、このプロジェクトには凝縮されています。

受講生の声

京都世界遺産 PBL 科目の良いトコ、面白いトコ！！

全国に PBL 科目はたくさんありますが、「世界遺産」をテーマにしたのは京都ならでは。関係者の方から、お寺にまつわる様々なお話や歴史など、普段聞くことができないお話を聞くことができます。また受講メンバーも色々な大学・学部から集まり、一緒に活動するため、他学部や他大学の学生･教員とも交流ができます。課題解決に繋がる提案を真剣に話し合い、最終的に発表も行うので、座学の講義だけでは経験できない達成感がありました。大学生活で何か新しいことにチャレンジしたい人にもおすすめです！

清水寺×立命館大学

二条城×同志社大学

仁和寺×立命館大学

上賀茂神社×京都産業大学

比叡山延暦寺×京都文教大学

醍醐寺×京都橘大学
醍醐寺×龍谷大学

2018 年度　受講生を募集しています！！

2018 年度の「京都世界遺産 PBL 科目」の受講生を募集します。他大学の科目でも、当財団の単位互換制度に参加する大学の学生であれば受講できます！

他大学の学生と交流したい方、京都のまちや文化遺産に興味のある方は、是非お申込みください。

出願は、各大学の単位互換登録期間(3 月下旬～4 月上旬)にお願いします。詳細は、当財団の WEB サイト(随時更新予定)または、2018 年 3 月上旬に公開されるシラバスをご確認ください。

科目名（仮）	開講大学	協力先世界遺産
特殊講義 I「京都の文化遺産とその保護～清水地域の防災への取り組み」	立命館大学	清水寺
「お山」の魅力を探る・伝える	京都文教大学	比叡山延暦寺
京都の世界遺産 PBL　～上賀茂神社の魅力を学生の視点で発信する～	京都産業大学	上賀茂神社
遺産情報演習 I (b) ～世界遺産醍醐寺プロジェクト活動をパブリック化する試み～	京都橘大学	醍醐寺
特殊講義 I「外国人観光客のための清水寺参詣曼荼羅（現代版）をつくる」	立命館大学	清水寺
コミュニティマネジメント特論：世界遺産と学ぶ課題発見・解決過程	龍谷大学	醍醐寺
世界遺産 PBL 科目　価値主導型に基づく文化遺産マーケティング	同志社大学	二条城
政策科学特別実習 1（京都の世界遺産　仁和寺）	立命館大学	仁和寺

詳しい情報はこちらでご覧ください　e 京都ラーニング　検索

学生から発信する京都の魅力

当財団では、京都学生祭典や京都学生広報部など多彩なインターカレッジの活動を行う学生団体を支援しています。こうした学生の活動は、学生にとって新たな出会いの場となり、また、学内では得難い学びと経験を通じて、成長できる機会となっています。今回は、特徴的な６つの活動とその魅力をご紹介します。

① 京都 B&S（Brother&Sister）プログラム

京都には、毎年約 100 万人もの修学旅行生や校外学習生が全国から訪れます。中でも、中学生では３人に２人が京都を訪れたことになり、修学旅行をきっかけに京都の大学に進学される方も大勢おられます。

京都 B&S プログラムは、こうした全国から京都へ訪れる修学旅行生や関西圏からの校外学習生に対し、「京都で学ぶ大学生」のボランティアが、自らガイド役となり、兄弟・姉妹（Brother & Sister）のように交流しながら、観光地（観光施設、寺社仏閣）や大学キャンパスなどを一緒に街歩きすることで、京都の魅力を直接紹介する事業です。2014 年度から京都市と JTB 西日本、当財団の３者による共同調査研究事業としてスタートし、今年で４年目を迎えました。

本プログラムの特徴は、京都の大学生が有名観光地だけでなく、京都にある大学のキャンパスを案内することにあります。大学生とのふれあいやキャンパスの見学は、将来の進路選択をする上で貴重な体験になり、学びの場にもなります。大学のまち京都の魅力を大学生が直接伝え、感じてもらうことで、京都の大学への進学に関心が高まることに期待しています。

ガイドの B&S スタッフ（大学生）にとっても、ボランティアを経験することで、京都の観光産業や地場産業、伝統工芸への理解が高まるだけでなく、自身の学生生活の充実やプレゼンテーション力の向上の場として期待されています。

B&S スタッフが修学旅行生を案内する様子

学生実行委員会の様子

「学生企画」ゲストと学生実行委員

② 京都から発信する政策研究交流大会

「京都から発信する政策研究交流大会」学生実行委員会は、京都の大学生、大学院生による政策研究や学修成果の発表を行う大会の企画、運営、広報を行っています。

大会は 13 年目を迎え、京都における政策研究発表の一大イベントとして定着し、毎年 70 組を超える発表者と 400 名を超える来場者があります。

学生実行委員は、政策系学部の教員を中心に構成する都市政策研究推進委員会から助言をいただきながら、発表者募集ポスター等の制作や事前説明会の開催のほか、大会当日の受付、分科会の運営、表彰式など、募集から大会当日まで、参加者がスムーズに発表できるよう活動を行っています。

大会当日は、分科会運営に加え、大会参加者の交流をより深めるため、学生実行委員が企画、運営する「学生企画」を開催しています。毎年、違ったテーマでゲストを招いており、2017 年度は「Challenge for the future」と題し、地域活性化やインバウンド観光に先進的に取り組まれているゲストをお招きし、パネルディスカッション等を実施しました。ゲストとの出演交渉やイベント構成、司会進行などを学生が中心になって行うことで、折衝能力や企画力を身に着ける機会にもつながっています。

学生実行委員会では、今後も充実した大会となるよう、広報、企画の充実に努め、学生間交流の場となるよう活動してまいります。

③ 京都学生祭典

京都学生祭典は 2003 年に始まり、「京都を活気づけ、感動・笑顔を創出する」、「京都の一員として、地域社会との繋がりを尊重する」、「京都で学び、地域社会と共に魅力を広く発信する」の 3 つの活動理念を掲げています。毎年 200 名を超える学生が実行委員として参画し、企業・大学・行政・地域の方々と連携しながら、留学生との国際交流や地域のパトロール、清掃活動、打ち水を用いた環境啓発など、多様な活動にも取り組むとともに、祭典の企画から当日の運営まで主体的に行っています。

2017 年は、1 年間の活動テーマを『「京都学生文化」の創出』とし、京都の学生が京都や世界の文化を学び、その魅力に迫り、文化の魅力と学生らしさを融合した新たな「京都学生文化」の発信を目的に、お茶の京都博ではティーアンバサダーとしてお茶のおもてなしを行ったほか、「東アジア文化都市 2017 京都」では、日中韓 3 カ国の「だし」を融合したスープの提供を行いました。

また、第 15 回という節目の年を迎えることができた感謝の気持ちと、より多くの方々に京都学生祭典を知っていただくため、京都学生祭典プレイベント「アニバーサリーフェスタ」を、京都学園大学京都太秦キャンパス（6 月 4 日）、京都駅前広場・室町小路広場・京都駅前地下街ポルタ（8 月 27 日）において開催し、来場者に学生ならではのパワーを感じていただくことができました。

そして、10 月 8 日に 1 年間の集大成として、平安神宮前・岡崎プロムナード一帯で京都学生祭典本祭を開催しました。1,000 人を超えるおどり手による「開演！京炎そでふれ！」にはじまり、グランドフィナーレでは第 1 回実行委員であった倉木麻衣さんとのコラボレーション企画を行うなど、来場者も 136,000 人と多くの方にお越しいただきました。

今後も、大学のまち京都・学生のまち京都の魅力を発信し、京都四大祭となるよう実行委員会は取り組んで参ります。

京都学生祭典 WEB サイト　http://www.kyoto-gakuseisaiten.com/

公式ツイッター@ KIF_saiten

京炎そでふれコンテスト

子ども企画

京炎みこし

4 京都国際学生映画祭

京都国際学生映画祭は、日本最大の国際学生映画祭であり、国内外問わず若手作家の登竜門として広く認知されています。京都を中心とする関西圏の「映画好き」の大学生で構成する「学生実行委員会」が主体となり、可能性に満ちた作品の中から、映画に新たな領域を加え得る才能を発掘し、京都から世界に発信しています。

「学生実行委員会」は、実行委員の一人一人が重要な役割を担い、世界の学生による自主制作映画の募集・審査や上映作品の決定のほか、プレイベントの開催や広報活動など、1 週間にわたって実施される映画祭の企画・運営を行っています。

第 20 回を迎えた 2017 年は、世界 38 の国・地域から 485 作品の応募がありました。その中からノミネート作品の選定を行う審査会では、学生実行委員それぞれの作品に対する想いがぶつかりあい、白熱した議論が行われました。また「映画祭のあるべき姿」や「映画祭を楽しんでいただくための工夫」について、大学教員・映像作家・映画館経営者など映画の専門家の方から助言をいただきながら、映画祭の当日に向けて準備を進めました。

11 月 25 日から 7 日間にわたり京都シネマで開催された本祭では、ノミネートされた全 10 カ国 16 作品の実写・アニメーション映画を上映しました。また、本映画祭の入選者で世界的に活躍されている映画監督によるトークショーを行うなど、国際色豊かな映画の祭典となりました。

学生実行委員会は、日本映画発祥の地といわれる「映画のまち・京都」から、映画を通じた国際交流の場を創出し、これからも世界と繋がり続ける映画祭を目指して活動していきます。

京都国際学生映画祭 WEB サイト　http://www.kisfvf.com/

公式ツイッター@ Kisfvf

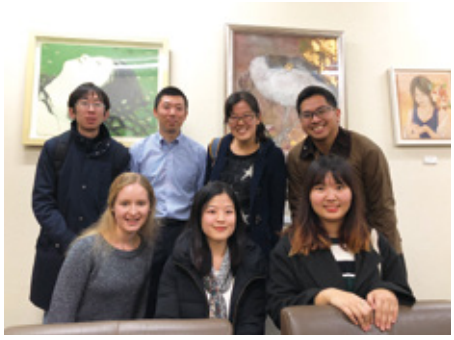
企画検討委員会の様子

トークショーの様子

入選作家と学生実行委員

5 留学生スタディ京都ネットワーク 留学生 PR チーム

華道体験の取材の様子


PR チームメンバー

世界中の都市、また日本国内の都市で留学生誘致の競争が激しさを増す昨今、京都が留学先として選ばれることは容易ではありません。

留学生スタディ京都ネットワーク※では、「京都在住の留学生から発信する情報で、海外で留学を考えている学生を京都に誘致したい」という理念のもと、2015 年に留学生 PR チームを立ち上げました。

PR チームメンバーは、毎週 1～2 日程度、大学コンソーシアム京都に勤務し、母国の日本留学関連情報の収集やニーズ調査（主要な日本語教育機関や留学生希望者が利用する雑誌やウェブサイトの情報など）、E メールや SNS を使った母国語での京都留学情報の発信やウェブマガジンの執筆、留学 PR イベント時のサポートなどを行っています。

特に SNS による情報発信には力を入れており、Facebook では 4 言語（英語、タイ語、韓国語、中国語繁体字）、中国向け（簡体字）には weibo と wechat による情報発信を行っています。

2017 年度は、7ヵ国（中国、台湾、韓国、アメリカ、タイ、インドネシア、ベトナム）9 名の留学生がメンバーとして活躍しています。

今後は、より具体的に留学生の日常（学生生活）をイメージできるよう、写真や映像を活用し、コンテンツの質にも注力していきたいと考えています。

※留学生スタディ京都ネットワーク

京都における留学生（外国人研究者を含む。以下同じ）の誘致及び受入体制の整備や留学生の知識・経験を地域の国際化・活性化に活かすための仕組みづくりをオール京都で取り組み、「大学のまち・学生のまち」としての京都の魅力向上を図ります。

留学生スタディ京都ネットワークが運営する「STUDY KYOTO」のWEBサイトはこちら　https://www.studykyoto.jp/ja/

京都留学生ショートムービーコンテスト ～「留学生目線」で京都留学を海外に PR ～

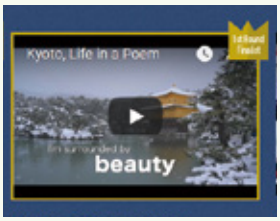
留学生スタディ京都ネットワークでは、2017 年度から新たに「京都留学生ショートムービーコンテスト」を実施しています。

『京都留学の魅力』をテーマに、海外在住で日本への留学を考えている高校生・大学生の方々に向け、「京都へ留学してみないとわからない、暮らしてみないとわからない『京都留学の魅力』」を、京都で学ぶ留学生ならではの目線で、3 分以内の動画にまとめ、表現していただきました。

中国、韓国、台湾、ベトナム、タイ、インドネシア、カナダ、コロンビア、南アフリカ等、19ヵ国におよぶ留学生から 23 作品もの素晴らしい作品の応募がありました。学生生活の一部を切り出したもの、手書きのイラストで京都の四季を表現したもの等、バラエティに富んだ独自の視点で「京都の魅力」が映像で表現されています。

2017 年 11 月に最終審査会が行われ、1 次審査を通過した 10 作品の中から最優秀作品や優秀賞・観客賞が選ばれました。

今回の応募作品は、留学生スタディ京都ネットワークで展開する京都留学の PR 活動で積極的に活用し、「京都留学の魅力」を世界に発信していきます。また、2018 年も第 2 回コンテストを実施する予定です。留学生の皆さん、是非ご参加ください。



最優秀作品「Kyoto, Life in a Poem」
応 募 者 名　Doshisha MBA

授賞式の様子

京都留学生ショートムービーコンテスト WEB サイト
（応募作品をご覧いただけます）https://www.studykyoto.jp/contest/

当財団が事務局を担う、京都学生広報部、京都から発信する政策研究交流大会、京都国際学生映画祭、京都学生祭典の実行委員の皆さんに、活動を通じたやりがいや、ご自身の成長などについて語っていただきました。

所属する団体の活動紹介と自分が担当する役割

Q 学生実行委員として、どういう活動・役割を担っているか教えてください。

木村　京都学生祭典（以下 学生祭典）では、学生が企画運営を行い、年間を通じて色々な活動をしています。広報部は、制作部門、動員戦略部門、web 部門、メディア部門に分かれていて、チラシやポスターの作成、配布、プレスリリースの作成、HP の運営、SNS による情報発信などを行っています。学生実行委員は 250 人ほどいます。広報部は、2 番目に大きなチームで約 50 人が活動しており、私は広報部長として、部員に役割を振って、進捗管理など、とりまとめをしていました。

山田　京都国際学生映画祭（以下 映画祭）では、広報部、本祭部、総務部の 3 つの部署に分かれています。広報部は PR 活動や、協賛企業とのやりとり、総務部は全体の管理や調整をしています。僕が所属する本祭部では、映画祭で中心となる作品の選考や、海外作品の字幕翻訳のほか、上映館のスタッフの方とやりとりをしています。約 40 人の学生実行委員のうち、本祭部は 16 人です。僕は、海外作品の字幕翻訳や、翻訳ボランティアの方が翻訳した内容のチェック、海外作家の皆さんとの連絡を担当していました。

濵本　京都学生広報部（以下 学生広報部）で広報チームリーダーをしています。学生広報部は、全国の中高生を対象に京都の大学の魅力を PR するため、コトカレという web メディアに記事を書くのが主な活動です。広報チーム、編集チーム、総務チームに分かれていて、私が所属する広報チームでは、「古都かれん」というアカウントを使って Twitter や Instagram 等で、コトカレの記事や大学生活、イベント情報などを中心に情報発信しています。他にもイベント紹介チームを主体に、中高生向けのイベントや 10 月に行われた京都学生祭典（本祭）にも出展しました。学生広報部のメンバーは約 50 人です。

大鳥井　京都から発信する政策研究交流大会（以下 政策研究交流大会）の学生実行委員長をしています。政策研究交流大会は、主に都市が抱える課題や政策を研究している京都府内の学生や院生が、日頃の研究内容を発表する大会です。学生実行委員は 16 人で、大会の運営・広報担当と、大会に参加した学生を対象としたプログラムの企画を担当する学生企画担当の 2 つのチームに分かれて活動しています。

学生実行委員に参加するきっかけ

Q 学生実行委員に参加したきっかけを教えてください。

山田　僕は映画が好きというのもありますが、英語も好きだったので、そのスキルを活かせそうな学生団体だと思い、興味を持ちました。すでに高校の友人が映画祭のスタッフをしていたので、入部前に話を聞いたことと、映画祭の Twitter で活動の様子を読んで、見学してみようと思いました。

　あとは、これまで同じ学科の人としか付き合いがなかったのですが、色々な人とコミュニケーションが取れる点が魅力的だと思います。また国際映画祭ですので、僕のように英語のスキルを活かした活動をしたいという人もいます。

濵本　私の場合は、1 回生の 4 月に学内のキャリアの授業で先生から学生広報部という組織が立ち上がって 1 期生の募集をしていると紹介があったからです。ちょうど広報に興味があったので入ろうと思いました。学内のサークルにも入っていますが、今は学生広報部の活動が主になっています。他のメンバーはカメラが好きだったり、自分でブログを書いたり、「発信することが好き」な人が多いと思います。自分の書いたこと、発見したことを共有したい人が多いと思います。

木村　私は、大学のサークルオリエンテーションで学生祭典のことを知りました。北海道から京都に進学して、自大学に閉じこもっていてはもったいない、色々な大学の人と関われる団体に入りたいと思い、まずは説明会に行きました。正直に言うと、実行委員の仕事内容に惹かれたわけではないのですが、雰囲気もよく、実行委員も多かったので、色々な大学の人と関われる点に魅力を感じました。

大鳥井　僕は 2 回生の時に、学内で「学生ファシリテータ」というファシリテーションを学ぶ活動をしていました。その活動を通じて、政策研究交流大会実行委員が募集されているのを知りました。当時は社会学に興味があったのと、自分は何が得意なのかなど、自分のことを全然知らなかったので、成長できるような環境に身を置きたいと思い、学生実行委員に入部しました。

活動してよかったこと、成長した点について

Q 活動して大変だったけど、今はよかったと感じることや自分自身が成長したと感じる点などについて教えてください。

山田　映画祭の活動では、国内の審査員をはじめ、委員会の先生方や関係者の方々とやりとりをして、映画祭の企画・運営について様々なご指摘をいただきました。頂いたご指摘をどう反映するかについて、学生実行委員で話し合うのですが、みんなの意見がぶつかりあったこともあります。また、海外作家の方で英語が第 2 言語だったことがあり、うまくコミュニ

ケーションが取れなくて大変だったこともありました。異なる大学のメンバーが集まっているので、調整する面では大変でしたが、メンバーの多方面に持つ人脈が役立った事もあります。例えば、映画祭の受賞トロフィーのデザインを公募した時など、学生実行委員に美術系の友達がいて声をかけてもらったりもしました。そういう点が強みでもあり、いいところだと思います。

個人的によかったのは、大学の友人以外の人と交流する機会を持てたこと、それ以上に翻訳ボランティアの方をはじめ、映画監督、映画作家、審査員の方など、普段関われない人と関われたことがいい経験になりました。

濵本　学生広報部は中高生をターゲットにした活動なのですが、今の中高生は私たちとも感覚が全然違っています。例えば私たちが「興味を持ってくれるかな」と思った記事や企画でも、中高生の反応が薄かったりすると、どうしたら中高生の興味を引くことができるのか、みんなで考えています。私自身、広報チームのリーダーをする前は、イベントを行う渉外を担当していたこともあり、現場で参加者の反応を、直に見ることができました。コトカレの活動は主に web 上なので、イベントで中高生の皆さんから「面白かった」とか「またやって欲しい」などといった意見を直接いただくと、活動して良かったと思いますね。

他にも、情報を発信する立場なので、京都への関心が強くなりました。私は学生広報部立上げの年に入部した 1 期生なので、学生広報部には愛着があります。夏に阪急電鉄とコラボし、企画・取材協力をさせていただいた「くるり×阪急京都線 沿線再発見スタンプラリー『京都の大学生』編」企画など、活動の場が広がっていくのが実感できてうれしいです。

大鳥井　政策研究交流大会の「学生企画」は、大会に参加する学生に向けたイベントなのですが、テーマが社会問題なので、集客が難しくて、どうしたら面白い企画になるか中身をメンバーと考えるのが難しかったです。また、話し合いが色々な方向に行ってしまうのも大変でした。その反面、正解のない話し合いをする中で、色々な大学のメンバーが集まり、深く話し合えたのは一番いい経験となりました。僕は「メンバーと深く話し合う」経験から、考える力と論理的思考が身について、色々な場面で活かしています。授業でも先生の言ったことを真に受けるのではなく、考えながら聞くようにしているので、最近では授業を受けるのが、どんどん面白くなってきています。

木村　私はもうすぐ引退なのですが、やりきった感じがします。色々な大学から多くのメンバーが集まって活動するため、週 1 ～ 2 回行う会議の日程調整や、メンバーの中でも活動に対する意識やモチベーションに差があって、部長としてみんなが同じ方向に意識を向くようにするのが苦労しましたね。

あとは、様々な外部企業や団体と連携して企画などを進める際に、企業や行政と学生では活動する時間帯が異なるため、時間やスピードを合わせ、かつ丁寧に対応するのが難しかったです。例えば協賛企業のロゴを広報物に掲載するにあたって、無理なスケジュールでチェックをお願いし、お叱りを頂いたこともありました。企業の方に直接アドバイスを頂けることは、普通の大学生活では絶対経験できないので、学生祭典の実行委員になってよかったと思います。

Q メンバーの意識に差があるという問題は、どの団体でも抱えている問題かもしれませんね。活動する中で、どんな工夫をされましたか。

木村　メンバーに仕事を頼む際、これは何のための作業で、最終的に何につながるのかを詳しく伝えるようにしました。ただし、まずは活動が楽しいと思ってもらえないと来てくれなくなってしまうので、会議や行事などでは楽しい雰囲気をアピールしました。あと率先して全ての行事に参加し、楽しい雰囲気を出しつつ、後輩を巻き込むようにしました。

活動を通じて、やればなんとかなるんだということが分かったことと、対話能力・コミュニケーション能力が成長したと思います。もともと人見知りで、人前で話すのは得意ではないのですが、自分の思っていることをしっかり言葉に出して伝えることを心がけるようになりました。

これから活動をしたいと思っている学生に向けて

Q こういった学外の活動に興味はあっても、なかなか踏み出せない学生の皆さんに向けてメッセージをお願いします。

濵本　「どういう団体なんだろう」と興味を持ったら、まず一歩踏み出して、実際に各団体を見に行くことがすごく大事だと伝えたいです。活動をしてみて、自分たちのモチベーションが高いといい反応が返ってくることがあって、やる気って大事だなと思っています。まだ何の団体にも入っていないのに、やる気をだせというのも無理だと思うので、「興味があればまず動いてみて」と思います。

木村　学生団体は他大学の人と出会える機会で、普段一緒にいる友達とは違う様々な人が集まるので、それだけで刺激を受けられます。さらに学生の立場で大学や行政や企業の人と関わることは、学生の今しかできないことだと思います。それを逃さずに、是非一歩踏み出してもらえればと思います。

山田　共通の話題がある人と集まるのも楽しいんだけれど、自分の知らないコミュニティに踏み出すと、新しい刺激をもたらしてくれます。僕自身が所属している映画祭は、映画に興味のある人でも、海外に関わりたいという人でもいいし、色々興味を持つきっかけがあると思います。学生生活には限りがあるので、もし興味があれば新しい機会になるかもしれないので、一歩踏み出してみるのは大事だと思います。

大鳥井　こうした活動を通じて、思ってもみなかった自分の良い面や悪い面が見えてくると思います。そういう点を見つけることは大学生活ですごく重要だなと実感しています。自分が今、何をしたらいいのかわからない人は、一歩踏み出してこういった学生団体に参加してみるのもいいのではないかと思います。何か 1 つでもいいから、やりがいを感じたことをやりきってみる、そうした経験が、全て自分の成長につながると思っています。

学生実行委員を募集しています！

京都学生広報部、京都から発信する政策研究交流大会、京都国際学生映画祭、京都学生祭典では、企画・運営を担う学生実行委員を募集しています。京都や学生生活の魅力を伝える記事を執筆したい方、広報に興味のある方、写真が好きな方、映画が好きな方、大会の企画・運営などに興味のある方、京都が大好きで何か活動を始めたい方は、ぜひ一度、見学にいらしてください。

【京都学生広報部】（お問い合わせフォーム）https://kotocollege.jp/contact-member

【京都から発信する政策研究交流大会】（問い合わせ先：大学コンソーシアム京都）
http://www.consortium.or.jp/project/seisaku/conference

【京都国際学生映画祭】（お問い合わせフォーム）http://www.kisfvf.com/contact/

【京都学生祭典】公式ツイッター @KIF_saiten

※募集時期や募集方法は、各団体によって異なります。
各団体のホームページをご確認の上、お問い合わせください！

6 京都学生広報部

京都学生広報部は、京都の大学生が自ら記者となり、京都の学生生活や街の魅力を学生の目線で取材し、WEBサイト「コトカレ」を通じて全国の中高生に発信しています。

京都学生広報部は、記事の企画、執筆を行う「企画・取材・編集チーム」、コトカレのPRや研修、部員募集などを行う「PRチーム」に分かれて活動しています。

他府県から京都の大学に進学した部員も多く、京都に進学した理由や、大学受験記、京都の大学を卒業した著名人へのインタビューなど、京都の大学の魅力を取材した記事のほか、四季折々に京都で開催される祭やイベント、京都らしい店舗や地域で活動される方を取材し、京都のまちの魅力発信にも取り組んでいます。

活動開始から3年が経過し、企業等から取材依頼のお問い合わせも増えており、京都の魅力を再発見する「くるり×阪急電鉄」のスタンプラリー企画に参画するなど、活動の幅を広げています。また、京都学生祭典では、京野菜を使ったオリジナルカレー「コトカレー」やオリジナル缶バッチの提供を行い、京都学生広報部のPR活動にも取り組んでいます。

今後は、WEBサイト「コトカレ」が全国の中高生に更にチェックいただけるよう、魅力的な記事を安定して提供するとともに、WEBサイトの成長とコンテンツの充実に向け、部員のスキルアップ研修にも取り組みます。また、各地域や大学、企業と協働した中高生向けのイベントを企画するなど、メインターゲットである中高生への活動浸透にも積極的に取り組んで参ります。

「コトカレ」WEBサイト　https://kotocollege.jp/
公式ツイッター@ gakusei_kyoto

京都学生祭典・本祭 大学PRブース出展の様子

オリジナルカレー「コトカレー」の販売

くるり×阪急京都線沿線再発見スタンプラリー
「京都の大学生」編のPR活動風景

[特集３]

出向経験者が語る
「出向を通じて得られたこと、学んだこと。」

財団事務局は、加盟校及び行政機関からの出向職員と財団雇用の職員により構成されています。財団の前身である京都・大学センター設立からこれまでに 147 名の大学職員の出向者を迎えました。2017 年度は、6 大学から 14 名の職員が出向しています。出向中は財団事務局において、大学のまち京都の発展に向け、所属大学・機関の異なる同僚たちと共に、多様な業務や価値観に触れながら日々、業務遂行と自己研鑽に努めています。

今回、これまでに財団へ出向された方々に、出向経験から得たこと、学んだこと。そして、現在、大学で仕事を進める上で活かしていることなどをお伺いしました。

COMMENT 01

龍谷大学人事課付（龍谷メルシー株式会社出向）

室矢 直人 さん

【出向期間】2006 年 4 月～ 2010 年 3 月
【出向時所属】高等教育研究推進事業部総括主幹、副事務局長

私は 2006 年 4 月から 4 年間、財団に在籍し、初年度は総括主幹として FD・SD を担当し、2 年目以降は総務担当副事務局長として総務・広報・全国大学コンソーシアム協議会事務局などの業務を担当しました。出向中、特に印象深いのは、文部科学省と大学間連携等に関する情報交換を積極的に行い、京都産業大学・佛教大学・龍谷大学を代表校として、文部科学省補助金「戦略的大学連携支援プログラム」に申請した結果、3 件とも採択され、多くの加盟大学の方と共同でプロジェクトを進めることができたことです。また、理事会等の打合せなどで他大学の学長等の要職の方や経済団体の方にお会いする機会が多かったのは、財団ならではの経験であったと思います。

財団では、職員各自が予算作成の時点から担当業務に携わり、責任と自覚を持って事業を推進していることや意思決定のスピードが早いこと、また、京都の大学全体にとって有益のあるパイロット的事業にチャレンジしていることが印象的でした。現在の職場でも、財団での経験を活かし、大学ではできないことにチャレンジ精神で取り組んでいます。

本当に、財団での経験は貴重なものばかりで、出向しなければ知り得ない多くの事を教えていただきました。また、同時期に出向された方やお会いした方との関係も出向しなければ得られないもので、本当に出向してよかったと思っております。是非、多くの方に、財団で様々な経験をして欲しいと思います。

COMMENT 02

京都大学 企画・情報部企画課 IR 推進室 掛長

野田 智子 さん

【出向期間】2007 年 4 月～ 2009 年 3 月
【出向時所属】高等教育研究推進事業部主幹

私は 2007 年 4 月から 2 年間、財団に在籍し、留学支援・国際交流事業及び SD 事業を担当しました。大学に入職してまだ 3 年目で職務経験も浅い中、突然大きな権限と責任を与えられたことに最初は戸惑ったものの、大学とはまた違う仕事の面白さとやりがいに目覚め、気づけば財団にすっかり“はまって”いました。

国立大学に所属する自分にとって、私立大学を疑似体験できる財団の事務局は、毎日が驚きと発見の連続。もちろん、仕事はもっと刺激的でした。

担当事業で最も思い出深い事業は「SDフォーラム」です。多くの人の助けを得ながら、200 人規模のフォーラムの企画・運営を主担当として仕切ったことは、これまでの 13 年にわたる大学職員生活の中でも 1､2 を争う大きな経験として印象に残っています。

財団への出向を通して学んだことは数えきれないほどありますが、しいてあげるならば「コミュニケーションとネットワーキング」「常に学び続けること」。この 2 つは仕事をしていく上で今もずっと大切にしています。

財団で過ごした 2 年間、そして出会った全ての方々とのご縁は、私にとってかけがえのない宝物です。その経験を糧に、これからも大学職員として歩み続けます。

COMMENT 03

京都産業大学 教学センター 課長補佐

山内 尚子 さん

【出向期間】2007 年 4 月～ 2009 年3月
【出向時所属】学生交流事業部主幹、高等教育研究推進事業部主幹

私は 2007 年 4 月から 2 年間、財団に在籍し、京都学生祭典等の企画運営支援と財団中期計画を策定する業務に携わりました。

中期計画の策定に際し、加盟大学 50 校の学長等から各大学の現状と課題・今後の展望について、直接お話を伺えたことが特に印象に残っています。20 代のうちに、本学では経験できないスケールの大きな仕事を任せてもらい、他大学の教職員と走り続けたことは、貴重な経験になったと同時に、自身の知識や経験の未熟さを痛感した 2 年間でもありました。

その経験が原動力となり、出向終了後、本学の職員派遣研修制度に応募し、FD や SD が組織にもたらす影響について研究しました。大学院進学を決意したのも、出向中に、ロールモデルとなる方が身近にいたこと、また、他大学に比べ本学の研修制度が充実していることに気づいたからです。

修了後は、FD や SD を推進する部署に異動し、現在は、教学センターで教務関係の業務に携わっています。

新しい企画を立案する時や、既存業務を見直す時には、他大学の事例を参考にします。その際には、当時の仲間に連絡すると、すぐ適切な方を紹介してくれるなど、今でもよく相談に乗っていただいています。大学はライバル関係であっても、出向中、切磋琢磨した同志でもあり、彼らの助言が私の活力になっています。この関係性が 10 年近く経った今も継続していることが、出向で得た一番の宝だと思います。

COMMENT 04

立命館大学 共通教育課 課長補佐

加藤 良直 さん

【出向期間】2005 年 10 月～ 2009 年 10 月
【出向時所属】総務・広報部主幹、教育事業部主幹

私は 2005 年から 4 年間、財団に在籍し、総務、広報、インターンシップ､京カレッジの業務を担当しました。当時の財団は、事業拡大路線から事業の「選択と集中」に舵を切る端境期にあり、今後の方向性に関する熱い議論をよく交わしたものです。

私は財団のアドミニストレータ研修に参加し、財団の方向性をテーマに論文を執筆し、プレゼンテーション発表も行いました。

生涯学習事業の京カレッジでは、京都市と連携し、京都力養成コースを新設するなど試行錯誤を重ね、目標以上の社会人受講生を集めました。

インターンシップ事業では、仲間の職員とともに 10 周年企画の実施、春のインターンシップの新設など、当時としては新しいことにチャレンジしました。

多くの苦労や失敗もありましたが、異なる大学の職員同士が様々な価値観を持ちつつ、同じ目標に向かって力を合わせた経験は、自大学へ戻ってからもチームで仕事をする上での財産になっています。

いま振り返れば財団は「人材の宝庫」でした。それは単に多彩なメンバーがいるというだけでなく、出向を通じて他大学や京都市の優れた点を理解し、それによって自大学の強みや弱点を客観視できたことも、出向で得られた得難い経験の 1 つだと思います。

出向経験者インタビュー！

財団事務局での出向を終え、自大学に戻って活躍中のお２人に、お話を伺いました。

大谷大学・大谷大学短期大学部
総務部事務部長

中島 弘喜 さん

1992 年大谷大学・大谷大学短期大学部へ入職。企画広報課、入試センター、校友センター、企画室を経て2008 年４月から2011 年３月までの３年間、財団へ出向。出向解除後は企画課、キャリアセンター課長、総務課長を経て、現職に至る。

INTERVIEW01

▶ 財団での業務体験

Q. 出向中の印象に残っている仕事や、出来事についてお聞かせください。

〈中島〉出向した初年度は、主幹としてインターンシップ推進事業室の室長を担当し、その後の２年間は、教育事業部の次長を務めさせていただきました。

当時、出向者はいろいろな事業に携わって勉強してもらいたいという、事務局長の意向もあり、多くの出向者は１年ごとに事業部や業務内容が変わりましたが、私は３年間ずっと教育事業部に在籍しました。

インターンシップを担当した出向当初は、大学では学生と関わる部署での業務経験がなかったため、学生とどう接したらいいのか、対応や判断に戸惑うことも多くありました。しかし、周りの職員に助けていただきながら、直接、学生といろいろな話ができる喜びを味わうことができました。また、総合コーディネーターであった龍谷大学の河村能夫先生や同志社大学の岡本博公先生には、インターンシップのイロハから色々と教えていただき、非常に勉強になりました。

次長となってからは、「単位互換」「京カレッジ」「インターンシップ」の各事業の担当者とできるだけ議論を重ねて、業務を進めるように努めました。各事業の主担当は各大学からの出向者でしたので、業務に対する考え方や目指す方向性が異なることもあり、調整するのに苦労したこともありました。

こうした経験は、大学に戻ってからも非常に活かせていると思いますね。また、他大学の教職員と一緒に仕事をすると、同じ業務でも違う視点からの意見を聞くことができ、とても刺激的で参考になりました。

▶ 出向で得られたもの、学んだこと、現在活かせていること

Q. 出向で得られたもの、学んだことをお聞かせください。

〈中島〉出向者によって業務に対する考え方や進め方が違うことに驚くことはなかったのですが、財団での事業推進のスピード感には驚きました。自大学と比べても並行して推進する担当事業が多く、スケジュールも短いため、加盟大学の学生や先生方にご迷惑をお掛けしないよう業務スケジュールの立て方も変わりました。

各事業は、担当者に任される裁量が大きいため、副事務局長や次長と相談しつつも、自らの責任でチームを取りまとめながら、事業を完遂させるといった、自大学では経験したことのなかった業務体験をさせていただきました。

また、インターンシップ事業で自大学にはおられない専門領域の先生方とさまざまな話ができたことも、ものすごく大きかったですね。他大学の教員の研究室に伺って打合せをさせていただいた際に、教員が事務職員に何を期待しておられるのかを聞かせていただくなど、とても参考になりました。

だから私は、本学からの出向者には、「他大学の先生と積極的に話をしておいで。」と伝えて送り出しています。

▶ あとに続く人たちへ

Q. 現在、財団に出向している大学の職員や今後、出向する職員に向けて、メッセージをお願いします。

〈中島〉各大学の事情にもよると思いますが、財団に限らず、できるなら若いうちに自らが手を挙げてでも出向されるのがいいと思います。自大学では経験できないことが経験できると思いますね。

ともに働く出向者はもちろん、他大学の教職員とともに事業を推進していく中で、自大学のことだけでなく高等教育界全般に視野が広がるので、大学事務職員としての業務に対する考え方や仕事の仕方が変えられます。また、人的ネットワークが広がることも出向した本人だけでなく、自大学にとっても、大きな財産となります。

財団を去る出向者の中には、送別会の際に涙ながらに挨拶される方も多くいました。皆さん、出向して、とても良い仲間と出遇われたんだなと思います。私自身今でも、他大学の教職員の方々とのお付き合いもあり、非常にありがたく思っています。

私の出向当時と比べると、各大学の財団に対するニーズや期待値は変わってきていると思います。当時と違い、今は、各大学が財団に先行してさまざまな事業に取り組むことも増えていますが、やはり国内随一の大学コンソーシアムとして、スケールメリットを活かした事業展開にチャレンジしていただければと期待しています。

INTERVIEW 02

同志社大学　国際連携推進機構
国際センター国際課長
松本 由利 さん

1991 年同志社大学へ入職。
学事課、入試課、商学部事務室、学生課を経て
2004 年 5 月から 2007 年 4 月まで財団へ出向。
出向解除後より国際連携推進機構。

▶ 財団での業務体験

Q. 出向中の印象に残っている仕事や、出来事についてお聞かせください。

〈松本〉財団には３年間出向しました。最初の２年は教育事業部で単位互換などを担当し、最後の１年は、高等教育研究推進事業部に在籍し教育支援を担当しました。当時は、今より部署も少なく、インターンシップ事業や、京都学生祭典などは、事業部を越えて、みんなで協力し合う体制でした。夜遅くまで残業するなど、忙しくもありましたが、職場にとても活気があり、業務も充実していたので、大変だったことよりも面白さの方が強く印象に残っています。

今でも私の中にずっと生き続けていることは、京都の大学の１つとして同志社大学が担うべき役割を考えさせられた３年間だったということです。財団の中期計画の策定などを通じて、加盟大学や京都市の方々と接する機会を得ました。そうした中で、京都の大学のために働くことが、結果として同志社大学にとってもメリットがあるということを実感できた３年間でした。だから、私は、同志社のために働いたという記憶はあまりないです。財団では、自大学では経験できない本質的なことを勉強させてもらったと思います。

▶ 出向で得られたもの、学んだこと、現在活かせていること

Q. 出向で得られたもの、学んだことをお聞かせください。

〈松本〉出向を通じて学んだことは、効率的に業務を遂行する点です。財団では、必ず企画立案、実行、検証、発表・評価を行っていました。出向から戻ってきて思う財団の良さは、意思決定のスピードがとても早かったことです。私はもともと決められた時間内で判断するスピードは速い方でしたが、財団では、間違った判断をすると、自分の大学だけの問題ではなく、加盟大学に迷惑を掛けてしまう点で緊張感があり、更に鍛えられた気がします。また、必ず事業を点検し、スクラップ・アンド・ビルドのスクラップをしっかりしていることも感心しますし、見習うべき点と考えています。

３年の出向期間では、一人で大きなプロジェクトを任されるので、物事を総合的に見ることができ、視野が広がったと思います。各自が分担された業務で何をするべきか明確に考えられるポジションだったと思います。

今後の財団に期待することは、国・文科省、京都府や市の政策なども発信していただき、大学独自ではできない部分を補っていただけるとありがたいと思います。

今も役に立っているのは、何より人的ネットワークです。大学の規模に関係なく、いまだに何かあれば、当時のメンバーで連絡をとりあっています。出向しなければ出会うことのなかった貴重な仲間、縁です。

私の場合、日々の業務において、何のために同志社大学があるのか、何のためにこの仕事があるのか、あらゆることすべてが「同志社のためだけではない」と考える姿勢が今でも活きているのは、財団で自分の立ち位置を再認識できたからだと思います。

▶ あとに続く人たちへ

Q. 現在、財団に出向している大学の職員や今後、出向する職員に向けて、メッセージをお願いします。

〈松本〉財団に出向したら、どこの部署に配属されても、大学ではできない仕事をさせてもらえるので、大学にいる時とは違った視点で学べることも多く、成長できる場だと思います。できれば、一番パワフルで、柔軟な 20 代後半から 30 代くらいの人に行ってもらうのが一番良いのでしょうね。逆に、係長になって何部署か経験された方が、財団で次長を経験されて、自信を持って大学に帰られるのも効果が大きいと思います。

財団への出向は、自分の大学の良さや、他大学の学生・教職員とのカラーの違いが分かったり、自分を見つめ直す機会にもなりますので、ぜひ経験すべきだと思います。

私自身も、キャリアだけではなく、人間的な成長にプラスになりました。外から自分の大学を見つめ直すことによって、自大学が京都に、日本に、もしくは世界に何ができるのかを考えることは必要だと思います。

あとは、ぜひ、もっと多くの加盟校の先生方にも、財団に積極的に関わっていただきたいと思います。先生方との関わりを通じて、その熱意や考え方に触発される職員が、私を含め沢山いるからです。

財団には今後もずっと刺激を与え続けていただきたいと思います。また、新しい方向性を見つける時期に来ているとも思いますが、そういう点でも今後の財団の活動に関心があり、とても期待しています。

公益財団法人
大学コンソーシアム京都
専務理事・事務局長
桂　良彦

当財団は、加盟大学を始め京都市・京都府からの出向者が事務局の中核を構成しています。出身の異なる職員同士が、異なる組織風土･文化を超えて交流することは、新たな気づきや学びにつながっています。また、大学出向者が所属の立場を越えて、財団職員として、大学のまち京都の活性化に向けた大学間連携事業などに取り組むことで、自大学を客観的に見ることのできる貴重な機会にもなっています。

当財団では、諸事業の企画・運営、総務、広報等の幅広い業務があり、個々人に委ねられる裁量も大きいことが職員のやりがいに通じています。そして、自らの成長の場としてポジティブに業務にあたることは、財団組織によい刺激を与え、出向者として送り出す所属大学の期待にも応えています。

今回、コメントをいただいた出向経験者の皆様が、財団への出向を経て、新たな価値観や人的ネットワークなど、かけがえのない財産を得たうえで、現在の仕事に活かされていることを率直にうれしく思います。

Information

国際事業部

2018年度「英語で京都をプレゼンテーション」研修（中級・上級）参加学生募集！

研修内容　英語で京都の魅力をプレゼンテーションするための講義、発表、及び伝統文化の概要説明と実技（茶道・華道など）を通じて実際に日本の伝統文化に触れるという研修プログラム。

開催日時　【上級】2018年5月中旬から毎週1回計6回（予定）13:30～17:00
【中級】2018年10月中旬から毎週1回計5回（予定）13:30～17:00

開催場所　キャンパスプラザ京都

募集について　詳細は、当財団WEBサイト（随時更新予定）
もしくは加盟校宛にフライヤーの送付、メールなどでお知らせします。
（上級の募集は4月上旬～、中級の募集は9月中旬～開始予定）

教育開発事業部

高等教育イベントNAVI「教まちや」をご活用ください

高等教育イベントNAVI「教まちや」は、
当財団が運営する、高等教育イベント情報の
ポータルサイトです。
主な機能は3つあります。

① 情報閲覧・投稿サービス

大学コンソーシアム京都の加盟校のイベント情報を中心に、全国の高等教育関連のイベント情報を投稿・閲覧いただくことができます。高等教育に関連するイベントであれば、どなたでも投稿いただけます。

② メルマガ配信サービス

イベント新着情報をメールマガジンで毎週配信しております。

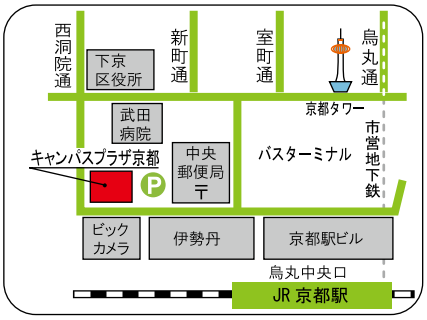
③「教まちや News」

ブログ形式で大学コンソーシアム京都の加盟校の「特色ある取組等」をお伝えいたします。

各大学・機関等で企画されたイベントの広報活動に、情報収集に、広くご活用ください！
メルマガ登録、イベント情報投稿をお待ちしております！

http://henews.consortium.or.jp/
または　教まちや　検索

公益財団法人 大学コンソーシアム京都
The Consortium of Universities in Kyoto

〒600-8216
京都市下京区西洞院通塩小路下る キャンパスプラザ京都内
TEL：075-353-9100（代表）
FAX：075-353-9101
E-mail：pr-ml@consortium.or.jp
WEBサイト：http://www.consortium.or.jp/

大学コンソーシアム京都